「ちりめん細工」についての一考察(1)
——技法について——

青　木　茂　美*

A Study of "Chirimen-Zaiku" (1)
——Technique——

Shigemi Aoki

要　旨　近年発行された手芸書に縮緬を用いた袋物や小物などの「ちりめん細工」を数多く見かけるが，その元型となる作品を明治・大正期の裁縫書・手芸書の中に見ることができる。当時は「お細工物」「裁縫細工物」と呼ばれており，明治・大正期の女子教育の中で重要な教科であった裁縫の教材としても取りあげられている。本研究では，「ちりめん細工」の種類と技法を明らかにすることを目的に，明治・大正期発行の裁縫書・手芸書から「ちりめん細工」に関する技法・製作方法の記述のあるものを抽出して資料とし，「ちりめん細工」の①用途②モチーフ③技法について分類・考察を行った。その結果，次のことが明らかになった。①用途は，女子の身の回り品を中心とした「袋物」「懐中物」など7区分に分類でき，「袋物」が半数以上を占めた。②モチーフは，「植物」「動物」など9区分に分類でき，71種類のモチーフを確認し，「植物」のモチーフが1/3を占めた。③技法は，「立体」「半立体」「平面」の3区分に分類でき，11技法が判明した。「ちりめん細工」は本来の裁縫技術の向上に繋ると同時に，当時「対象物を立体的に見る目」を養う最適な教材でもあった。

I　は　じ　め　に

縮緬（ちりめん）は絹織物の一種で，布面の細かい「しぼ」が特徴であり，この「しぼ」がやわらかくふくらみのある風合いや伸縮性を作り出している。近年，この縮緬の小裂をはぎ合わせて作る袋物や小物等を扱った手芸書が多数発行されているが，その元型となる作品を明治・大正期の裁縫書・手芸書の中に見ることができる。現在はその使用材料から「ちりめん細工」という名称[1]が一般に定着しているが，これらは当時の「お細工物」「裁縫細工物」と呼ばれていたものの範疇にはいる。「お細工物」はすでに江戸時代より中流以上の家庭の女子のたしなみとして作られていたが，その一方では専門の職人によって技術的に極めて高い水準にある手工芸品として生産されている状況にあった。そして明治期には女子教育の中でも重要な教科であった「裁縫」の教材[2]として多数とりあげられている。

そこで本研究では，材料を縮緬に限定した袋物，小物等の細工物を「ちりめん細工」と定義し，明治・大正期にどのような「ちりめん細工」が製作され，技法が用いられていたかを明らかにすることを目的とした。方法は，当時の裁縫書・手芸書等を資料とし，用途，モチーフ，技法の分類を行い，そこから「ちりめん細工」の技法の表現効果について考察を試みた。

* 本学講師　被服構成

Ⅱ 資　　料

資料は次の3種類である。

資料1．明治・大正期の裁縫書・手芸書資料

明治・大正期の裁縫書・手芸書[3)4)]の中から「ちりめん細工」の技法や製作方法に関する記述のあるもの22冊（資料NO. 1～NO. 22[5)～26)]）を抽出した。表1に示す通りである。

資料2．古作資料

姫路・日本玩具博物館[27)]所蔵14点，高山・藤井美術民芸館[28)]所蔵23点，高山・平田記念館[29)]所蔵30点の「ちりめん細工」古作の写真と，「ちりめん細工」の古作掲載誌[30)]を資料1の補助資料とした。

資料3．古作復元資料

近年発行された古作復元を中心とした「ちりめん細工」の手芸書[31)～37)]とそれを基に製作した作品65点を資料1の補助資料とした。

表1　明治・大正期の裁縫書・手芸書資料

資料No.	書　　名	著 者 名
1	婦女手芸法	須永金三郎
2	裁縫と編み物	大橋又太郎編
3	女子裁縫新書	中村　寿女
4	女子手芸要訣	下田　歌子
5	裁縫と手芸	樗溪　道人編
6	新撰女子の手芸	鏑木かね子編
7	実用裁縫全書	小岩井規太郎 塩田　真三
8	裁縫細工物全書	岡本　政子
9	女子の技芸	下田　歌子
10	和洋裁縫大全10の下・11の上下	小出新次郎
11	摘み製作新書	梶山　　彬
12	手芸と編物	香蘭女史編
13	裁縫教科書（教育実用）	裁縫研究会編
14	和洋裁縫独まなび	栗原　秀子 大和　花子
15	裁縫おさいくもの	伊藤　文子 小川　錠子他
16	摘み細工指南	山田　興松
17	和洋裁縫講義録	渡辺　勝用編
18	続裁縫おさいくもの	伊藤　文子 小川　錠子他
19	女子手芸講義録 細工物科・裁縫小物科	不　　明
20	新編裁縫の秘書	高橋貴四郎
21	実用新式　戸板裁縫全書	戸板　関子
22	和洋裁縫講習録1～13号	伊藤きん子編

Ⅲ 「ちりめん細工」古作について

1. 用途別分類

(1) 方法

資料1，2，3に記されている「ちりめん細工」の作品をその用途別に分類した。資料1について製作説明つき（図案のみは除く）作品の作品数を調査した。

(2) 結果および考察

「ちりめん細工」を用途別に分類した結果は表2に示す通りである。「袋物」「懐中物」「裁縫用具」「小箱」「置物・飾り物」「玩具」「その他」の7区分に分類することができ，その代表的な作品を図1～12に示した。

資料1の製作説明つき作品は全部で150点あり，延べ数にすると264点あった。その中で一番多いのが「袋物」である。資料22冊中19冊に記されており，作品数84点，延べ数にすると149点で全体の56％と半数以上を占めていることから，すでにこの時代に多種多様な袋物が考案されていたことがわかる。その中でも特に「琴の爪入れ」の小袋（図1）は造形的にも工夫が凝らされており，美しく種類も多い。小さな爪をしまっておく「用」と飾っておく「美」の両方を兼ね備えており「ちりめん細工」の特徴をよく表している例といえる。

資料1に記述はないが，資料2には「米袋」（図4）の古作があった。「仏供米（ぶくまい）袋」「一升袋」とも呼ばれ，米を祝い事に贈る，法事や葬式に供える習慣があった頃に木綿の米袋をさらに包んだ外袋で，大きさは1，2，3，5升入れがある。小裂を色合いよくはぎ合わせたものと袋側面や底面に図柄を緻密に細工したものとがあり，祝儀用・不祝儀用の袋を区別していたことがその図柄や色合いからもわかる。

また，その他に分類した「肘付き」（図11）が資料12冊に記されており，作品数10点，延べ

表2 「ちりめん細工」用途別分類

（点）

区分	作品名	資料1		
		資料NO.	作品数	作品延べ数
袋物	琴の爪入れ（図1） 香袋（図2），守巾着（図3） 数珠入れ，米袋（図4）， 手提げ巾着袋	2,3,5,6,7,8, 10,11,12,13, 14,15,16,17, 18,19,20,21,22	84 (56.0%)	149 (56.4%)
懐中物	楊枝入れ（図5） 櫛入れ，箸入れ 懐紙入れ	2,12,13,18,19	8 (5.3%)	8 (0.3%)
裁縫用具	針さし（図6） 指ぬき，糸巻	8,13,15,18,19, 20	9 (6.0%)	12 (4.5%)
小箱	小物入れ（図7） 裁縫箱	8,12	5 (3.3%)	9 (3.4%)
置物 飾り物	写真入れ（図8） 動物の置物（図9） 薬玉，屠斗，お雛様	2,6,8,11,12, 16,20,22	9 (6.0%)	13 (4.9%)
玩具	お手玉（図10） がらがら，人形 動物の縫いぐるみ	15,16,18,22	15 (10.0%)	20 (7.6%)
その他	肘付き（図11） 背守り（図12） お鈴敷き，迷子札 しおり（図8），根付け	2,3,5,6,8,12, 13,14,17,18, 19,20,21	20 (13.3%)	53 (20.1%)
		総数	150 (100.0%)	264 (100.0%)

*□は資料2，3より抽出

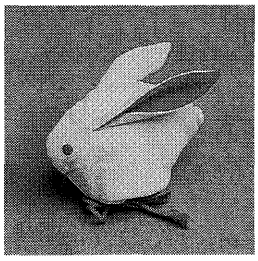


図1 琴の爪入れ（兎袋）

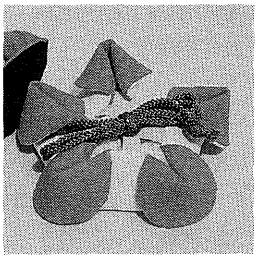


図2 香袋（梅袋）

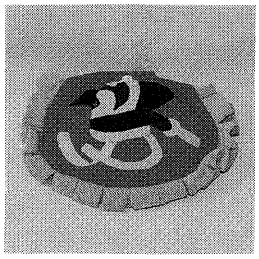


図3 守巾着

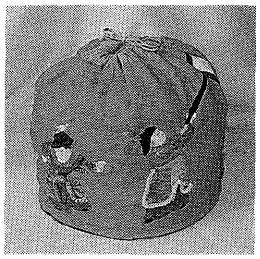


図4 米袋

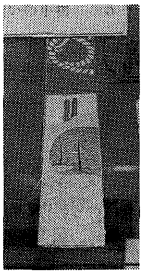


図5 楊枝入れ

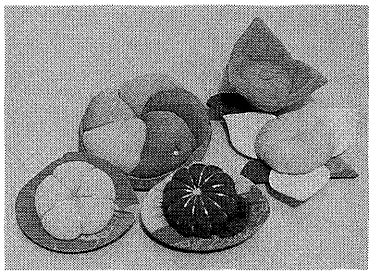


図6 針さし

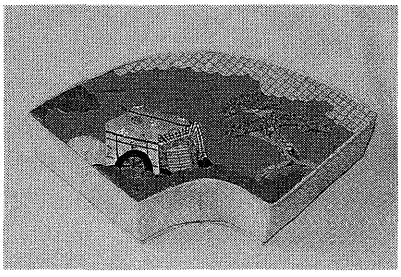


図7 小箱

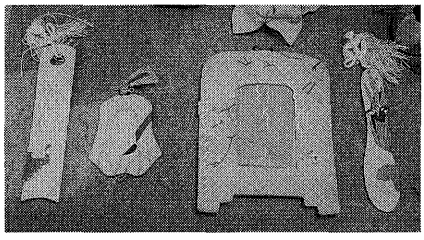


図8 写真入れ（中央2点），しおり（両脇）

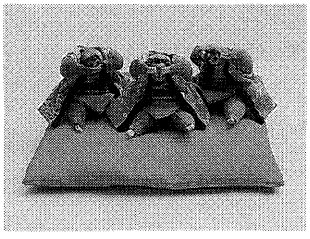


図9 動物の置物（三猿）

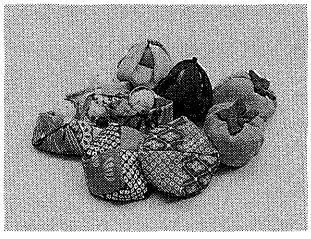


図10 お手玉

図11 肘付き

図12 背守り

※図3，4，7は日本玩具博物館所蔵作品
※図5，8，11は平田記念館所蔵作品
※図12は，藤井美術館民芸館所蔵作品

数にすると43点あるのも興味深い。「肘付き」は「肘布団」とも呼ばれ，着物の肘をいためないように机などに寄り掛かる際に敷いた小さな布団で，当時の読書には欠かせぬ小物であった。

そして，おもに女児の「玩具」や「守り巾着」「背守り」「迷子札」などの子供の成長や安全を願って作るものにも「ちりめん細工」が用いられていることがわかった。

「ちりめん細工」は，いずれも当時の生活必需品や女子の身の回りの実用品・装飾品で，布地残片を上手に利用して作ることのできる小型のものであったことがわかった。

2. モチーフの分類

(1) 方法

資料1，2，3に記されている「ちりめん細工」の作品のモチーフを分類した。資料1については1．の用途別分類と同様に作品数を調査した。

(2) 結果および考察

「ちりめん細工」に用いられているモチーフを分類した結果は表3に示す通りである。「植物」「動物」「鳥」「魚」「虫」「人物」「器物」「幾何模様」「その他」の9区分に分類することができ，その代表的な作品を図13～20に示した。資料1に見られるモチーフは71種類で，作品150点中129点についてモチーフが判明した。

1．の用途別分類の結果からも判るように「植物」は，モチーフ数が全体の1/4，作品数は1/3近くを占めており，特に「花」のモチーフが多い。「ちりめん細工」が女子の身の回り品に用いられていることが大きな要因と考えられる

表3 「ちりめん細工」使用されているモチーフ

(点)

区分	モチーフ名	資料1 モチーフ数	資料1 作品数
植物	松，竹，梅，桜，桔梗，椿，菊，菖蒲，牡丹，蓮（図13），朝顔，桐，薔薇，松かさ，瓢箪，ほうずき，柿，みかん，栗，桃	17 (23.9%)	42 (32.5%)
動物	兎，鼠，猿，狐，狸，犬，猫，鹿，獅子，猪，馬，亀（図14）	12 (16.9%)	34 (26.4%)
鳥	鶴，にわとり，ひよこ，鳩，雀（図15），鶯，千鳥，おしどり，みみづく，カナリア	8 (11.3%)	9 (7.0%)
魚	金魚（図16），鯛，たこ，海老，ふぐ，鯉，蛤	7 (9.9%)	9 (7.0%)
虫	蝉，蝶（図17）	2 (2.8%)	3 (2.3%)
人物	子供（図18），三番叟，坊さん，越後獅子，唐人，金太郎，福助，お多福，恵比須，大黒	5 (7.0%)	11 (8.5%)
器物	兜，折鶴（図19），茶壺，だるま，風車，巻物，奴凧，薬玉，扇，宝船，隠れ蓑，羽衣	8 (11.3%)	9 (7.0%)
幾何模様	市松，菱，亀甲（図20），青海波，七宝，籠目，檜垣，分銅，立枠，蜀甲，鱗，網代，縞	12 (16.9%)	12 (9.3%)
その他	文字，風景	0	0
	総数	71 (100%)	129 (100%)

*□は資料2，3より抽出

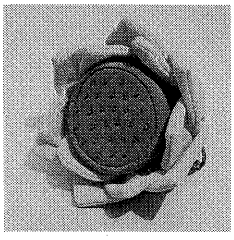


図13 植物（蓮袋）

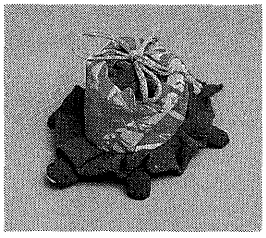


図14 動物（亀袋）

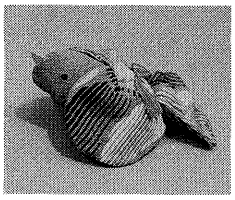


図15 鳥（雀袋）

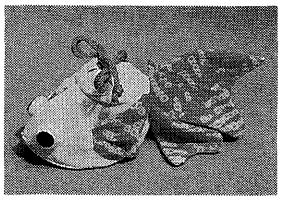


図16 魚（金魚袋）

図17 虫（蝉袋）

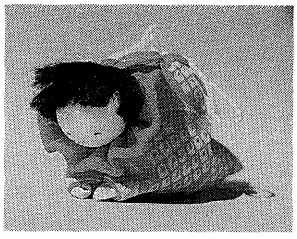


図18 人物（這々人形袋）

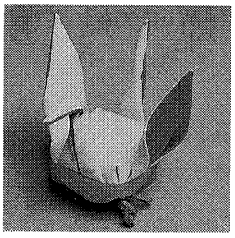


図19 器物（折鶴袋）

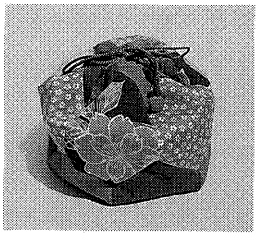


図20 幾何模様（亀甲袋）

が，「植物」はモチーフの中でも季節感があり，形も美しく色彩も豊富であること，図案化が容易なことから，多種多様に応用し，広範囲の用途に用いられていた。

「動物」や「鳥」は，身近な小動物や小鳥，十二支や昔話に登場しているなどのなじみ深いものをモチーフにして「守り巾着」「香袋」「玩具」「飾り物」などが作られていた。「動物」「鳥」両方あわせると作品数は全体の1/3を占めている。また「子供」をモチーフにしたものも多い。「這々人形（這い子）袋」「手つなぎ人形袋」「座り人形袋」「かいまき人形袋」「洋装人形袋」などの「袋物」や「迷子札」にも様々な子供姿が用いられていた。これらの顔があるモチーフの共通点は，同じ型紙を用いて製作しても目鼻をつける時に作り手の個性が自然に表現されることで，作り手にとっては愛着のわくモチーフである。

「鶴」「亀」「鯛」「海老」「松竹梅」「宝船」「恵比須」「大黒」などは，区分を超えて縁起物として好まれるモチーフであり，「守り巾着」「琴の爪入れ」などに用いられていた。また，これらのモチーフの「袋物」は祝いの品として贈ったり，祝儀の席に飾るためや，嫁入りの披露に持参したりする時に重宝された。時として実用以外の「飾り物」としての意味合いが大きくなるモチーフである。

「ちりめん細工」のモチーフは広範囲にわたっており，各区分においても種類が多いということがわかった。モチーフの特徴をいろいろな技法を駆使して多様に表現し，多くの作品が作り出されていた。

Ⅳ 「ちりめん細工」の技法について

1. 技法別分類

(1) 方法

資料1，2，3より「ちりめん細工」に用いられている技法をできあがりの形状から「立体」「半立体」「平面」の3区分に分類した。また，資料1について作品数を調査した。

(2) 結果および考察

分類の結果，11技法が判明した。表4，5に示し，以下順に技法を簡単に説明し，考察する。

1) 立体技法（立体物）（図1，2，6，9，10，13，14，15，16，17，18）

モチーフを立体的に構成するためにこれを分解し，平面に展開する。それぞれの部分の原型を作り，布地に型紙をあてて裁ち，縫い合わせて組み立てる技法。保形のために綿を入れてふくらみを持たせたり，針金を入れて自在な形を作り固定させることもある。「袋物」にこの技法を用いる場合は，モチーフの一部分（例えば，花芯，胴体部分）に綿を詰めないで，袋状にして口縁布を付け，結び紐を通して物を入れる機能をもたせる。

この技法を表す名称は資料からは見つけられなかったので，本稿では便宜的に「立体物」と名付ける。表5に示す通り，「立体物」は作品150点中半数を超える作品に用いられており，「琴の爪入れ」「香袋」「動物の玩具・置物」「針さし」などが作られていた。中でも「袋物」は「立体物」の2/3を占めており，「ちりめん細工」の代名詞となるほどである。

「立体物」の「袋物」がこのように明治・大正期の裁縫書・手芸書に多数取り上げられたのは，当時の徐々に「洋裁」を導入してゆく裁縫教育が背景にあったと推察する。「対象物を立体的に見る目」を養うには「ちりめん細工」の「袋物」「玩具・置物」は最適な教材であり，また，多くの古作が残っていることからも当時の女性達には新鮮で興味をひくものであったと思われる。

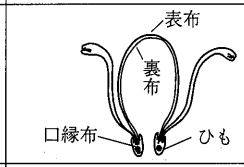
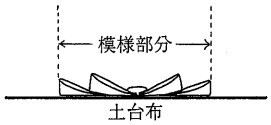
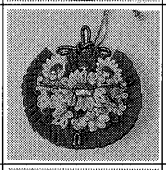
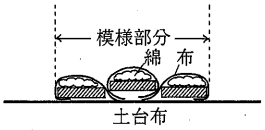
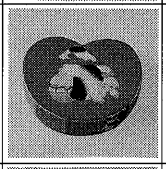
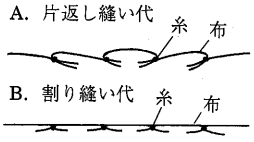
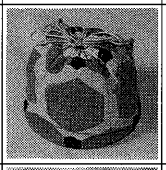
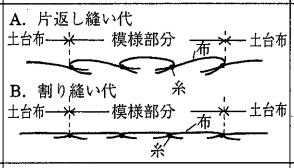
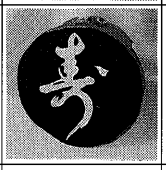
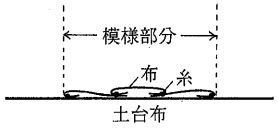
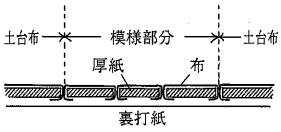
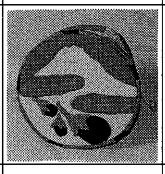
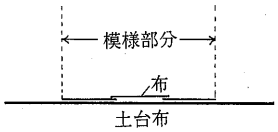
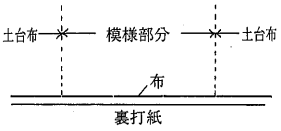
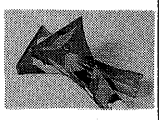
2) 半立体技法

①摘み細工

正方形に切った小さい布を摘んで折りたたんだものを基本単位（角摘み，丸摘みなど）とし，これを種々に組み合わせて土台となるものの上に図案を埋めるように貼り付ける技法。

この技法は，基本単位を作って図案を埋めるという独特の表現方法で他の技法には見られな

表4　技法の分類

形状	名称	技法断面図	縫・貼の別	使用例	(□の写真)	資料No.
1 立体	立体物		縫	動物の玩具・置物 針さし，人形 香袋 琴の爪入れ		2，3，6，8，10，12，14，15，18，19，20，22
2 半立体	①摘み細工		貼	守巾着の表 小箱のふた 写真たて 薬玉		11，16
	②押し絵 —盛りあげ式—		貼	守巾着の表 小箱のふた 写真たて 背守り，懐中物		1，4，5，6，8，9，12，13，19，21
3 平面	①はぎ物		縫	はぎ袋 肘付き 針さし		2，3，5，6，7，8，10，12，13，14，18，19，20，21
	②縫い綴り		縫	袋物の側面 袋物の底面		1，4，5，10，12，19
	③切り付け		縫	袋物の側面 袋物の底面 肘付き		13
	④押し絵 —毛抜きあわせ式—		貼	懐中物 小箱のふた 袋物の底面		9
	⑤貼り付け		貼	懐中物，しおり 小箱， 袋物の底面	 ＊梅の花のみ貼り付け	9，13
	⑥切り貼り		貼	小箱	 ＊箱側面のみ切り貼り	12

＊3③の写真は平田記念館所蔵作品。1の写真を除く他7点は日本玩具博物館所蔵作品。

表5　資料1の技法による分類

作品総数150(点)

技法名	作品数	作品名　( )内は作品数
立体物	84 (56%)	袋物(49)，玩具(15)，置物(9)，針さし(4)，その他(3)
押し絵—盛りあげ式—	19 (12.7%)	楊枝入れ(8)，迷子札(3)，守巾着(2)，その他(6)
はぎ物	28 (18.6%)	袋物(11)，肘付き(10)，針さし(5)，その他(2)
細工技法なし	19 (12.7%)	袋物(19)

い美しさがある。特に小さい花びらや鳥の羽などの表現にはその効果が表れていると言える。しかし，モチーフによっては適さないものもあり，図案に限度がある。基本単位自体がつぶれやすいことと貼る技法のために土台が変形しないことが条件となり，「守巾着」の表や「小箱」のふた，「写真たて」などに用いられていた。

②押し絵—盛りあげ式—（図8，12）

図案（下絵）を細かい部分にわけたものを厚紙に写しとって切り抜き，一片ごとにそれよりも3分（約1cm）ほど大きく切った布で包む。この時に厚紙と布の間に綿を入れて膨らみをつける（綿を入れない場合もある）。これらの各片を下絵に基づいて組み合わせながら土台布に貼り付けて画面を構成する技法。

この技法は，どのような図案でも表現可能で，綿を入れる量を加減することで微妙な立体感を出すことができる。厚紙の型紙が芯となり変形することはないが，貼る技法のために土台が変形しないことが条件となり，「守巾着」の表や「小箱」「写真たて」「楊枝入れ」などに用いられていた。「背守り」は例外で着物の背に縫い付けられていた。

3)　平面技法

①はぎ物（図20）

小さな布をたてよこにはぎ合わせて必要な大きさの用布を構成する技法で，不定形の布をはいでゆく場合と幾何学模様の型紙を作りその型紙を基にして布地を裁ってはいでゆく場合とがあり，はぎ方にも「並はぎ」(縫い代を片返し)，「割りはぎ」（縫い代を割る），「かけはぎ」（折り返した縫い代をつきあわせてかがる）の3方法がある。「割りはぎ」と「かけはぎ」は，製作工程に相違はあるもののできあがりの形状は同じである事から，本稿では同一技法とみなし，「はぎ物」をA「片返し縫い代」とB「割り縫い代」の2技法とした。

この技法は，小裂を使って作品を作る時に用いる技法の中で最も基本となるもので，どんなに小さな布でも思いのままの大きさの用布を作ることができ，形の組み合わせ方や配色方法で模様は無限大である。また，はぎ合わせながら立体的な袋状のものを作ることも可能であり，これらを利用して「はぎ袋」「肘付き」「針さし」などが作られていた。

②縫い綴り（図4）

別布で作った模様部分を土台となる用布をくりぬいてはめ込み，周囲をはぎ合わせる技法。資料1には多少の製作手順の相違はあるものの基本技法は同じと判断される「切りばみ」「切りばめ縫い」「はぎ細工」「はぎ込み物」の別名称の技法があり，本稿ではこれを同技法とした。はぎあわせ方は3）①のはぎ物と同じ2技法であり，どちらもよく用いられる。

この技法は，どのような図案も表現可能であるが，土台布のくりぬいた部分に模様をはめ込んではぐために，他の技法よりかなり高度な技術と時間を要する。またA「片返し縫い代」にするのとB「割り縫い代」にするのでは表面の効果に相違が見られる。Aは別布をはぎ合わせた風合いが布地表面によく表れており，Bは一枚の布に模様が描かれているかのように見える。どちらもそれぞれの美しさがあり精巧な感じがする。「手提げ巾着袋」「米袋」の側面や底面に「人物」「風景」「文字」などの細かい細工をする時に用いられていた。

③切り付け（図3，11）

用布の上に別布で作った模様部分をのせ，周囲の縫い代を中に折り込んでかがったり，くける技法。アップリケ（appliqué　仏）と同じ。

この技法もどのような図案も表現可能である。簡単な技法のうえ，完成作品に後付けすることが可能で応用範囲が広い。「袋物」の側面や底面，「肘付き」の表などに用いられていた。

④押し絵―毛抜きあわせ式―（図5，7）

別名「切りばめ」とも呼ばれ，2）②の押し絵―盛りあげ式―のように高低を作らず，平面に仕上げる。図案を厚紙に線で描き，模様部分をくり抜いたまわりにも別布を貼って包んでおく。そして元の位置へくり抜いた模様部分の押し絵をはめ込んで貼る技法。

この技法は，貼る技法であるが一見すると縫って縫い代を割った「縫い綴りB」のようにも見える。模様と土台の部分すべてに厚紙の型紙が入っているので，平らではあるが堅く厚みがあるため，「小箱」のふた，「袋物」の底面，「懐中物」に用いられていた。

⑤貼り付け

図案通りに切り抜いた和紙（裏打ち紙）をそれぞれ布の裏から貼り，その和紙通りに切って土台の用布に貼る技法。

この技法は，単独で用いられることは少ない。「押し絵―盛りあげ式―」と併用して図案の遠近感を出すために遠景の部分に，「縫い綴りA」「切り付け」「押し絵―毛抜きあわせ式―」と併用して縫い代が中に折り込めないほど小さな図案部分や薄く軽やかな感じを表現したい部分に効果的に使われ，「小箱」「懐中物」「しおり」に用いられていた。使用中のはがれ，裁ち目のほつれが短所である。

⑥切り貼り

和紙を裏打ちした布の裁ち端を突き合わせて貼る技法。図案を用いる場合は，和紙（裏打ち紙）に図案を線で描いて切り，模様部分とそのまわりの部分の型紙を作る。それをそれぞれ布の裏に貼って和紙通りに布を切り，くり抜いた模様部分を元の位置へはめ込んで貼る。

この技法は，薄くできあがるのが特徴ではあるが，布の裁ち端を突き合わせて貼るために応用範囲が狭く，「小箱」の側面などに用いられていた。⑤と同様に使用中のはがれ，裁ち目のほつれが短所である。

2. 同一モチーフによる技法別表現効果の比較

1．の技法別分類の結果および考察をふまえて，判明した11技法のうち，「はぎ物」を除く9技法を用いて同一モチーフを表現し，技法別

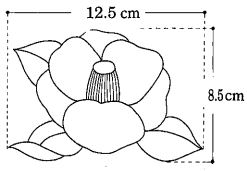


図21　椿の図案

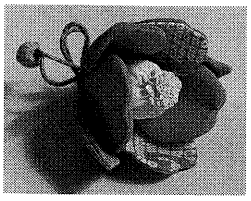


図22　1．立体物

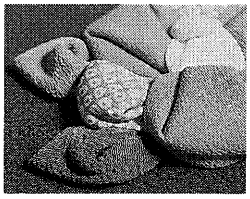


図23　2．つまみ細工

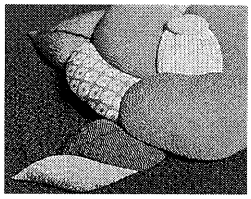


図24　3．押し絵
―盛りあげ式―

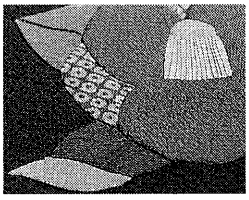


図25　4．縫い綴りA
―片返し縫い代―

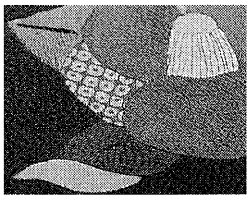


図26　5．縫い綴りB
―割り縫い代―

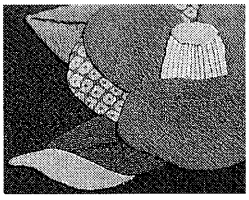


図27　6．切り付け

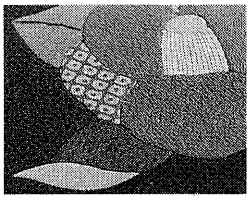


図28　7．押し絵
―毛抜きあわせ式―

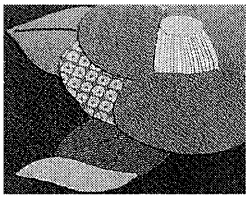


図29　8．貼り付け

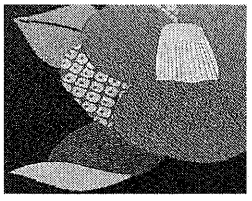


図30　9．切り貼り

表現効果の比較考察を行った。

(1) 方法

①モチーフ：「椿」(図21)

②材料：縮緬（赤，白，黄，緑，紺，しぼり柄），和紙（表地と同色），ボール紙，化繊綿，ひも，絹手縫い糸，でんぷん糊，布用ボンド

③技法：1. 立体物
2. 摘み細工
3. 押し絵―盛りあげ式―
4. 縫い綴りA―片返し縫い代―
5. 縫い綴りB―割り縫い代―
6. 切り付け
7. 押し絵―毛抜きあわせ式―
8. 貼り付け
9. 切り貼り

(2) 結果および考察

椿の花を9技法を用いて表現した結果は図22～30に示す通りである。

明らかに表現効果に相違が見られるのは，「立体物」「摘み細工」「押し絵―盛りあげ式―」の立体・半立体の3技法であり，それぞれの技法の特徴がよく表れている。しかし，平面6技法については遠目からではほとんど差異は認められず，技法の判別は難しい。間近で見ると縫い代の倒し方の区別はつくが，「縫い綴りA」と「切り付け」，「縫い綴りB」と「押し絵―毛抜きあわせ式―」「切り貼り」については触れたり裏の始末を見なければ判別できなかった。この結果から，見た目の効果はほぼ同じでも用途により「縫う」「貼る」の技法を使い分けていることが理解できた。

また，実際に各技法を体験して，以下の事がわかった。

①「摘み細工」には他の技法の2～4倍以上の布地を必要とする。

②「縫い綴り」にはかなり高度な技術と時間を必要とする。

③「貼り付け」を広い面積に用いるのは不向きである。

④現在の裏打ちは接着芯が主流になっているが，和紙を裏打ちに用いた作品は，縮緬の風合いを損なう事なく補強，伸び止め，ほつれ止めの役目を果たしていて重要な材料である。

⑤やわらかくふくらみのある風合いや伸縮性のある縮緬を材料に用いることによって「ちりめん細工」の技法がより効果的に表現される。

⑥「ちりめん細工」の技法は緻密であるが，特別な器具を使用しないで製作することができ，本来の裁縫技術の向上にも繋る技法である。

V まとめ

本研究は，「ちりめん細工」の種類と技法を明らかにするために明治・大正期の裁縫書・手芸書を資料とし，用途，モチーフ，技法の分類を行った。そして次の結果を得た。

1. 明治・大正期の裁縫書・手芸書には，すでに「ちりめん細工」の製作説明つき作品数が150点あり，延べ数にして264点を確認した。

2. 「ちりめん細工」の用途は，女子の身の回りの実用品を中心とした「袋物」「懐中物」「裁縫用具」「小箱」「置き物・飾り物」「玩具」「その他」の7区分に分類でき，「袋物」が作品数の半分以上を占めていた。

3. 「ちりめん細工」のモチーフは，「植物」「動物」「鳥」「魚」「虫」「人物」「器物」「幾何模様」「その他」の9区分に分類でき，71種類のモチーフを確認し，「植物」のモチーフが作品数の1/3近くを占めていた。

4. 「ちりめん細工」の技法は，できあがりの形状から「立体」「半立体」「平面」の3区分に分類でき，「立体物」「摘み細工」「押し絵―盛りあげ式―」「はぎ物（2種）」「縫い綴り（2種）」「切り付け」「押し絵―毛抜きあわせ式―」「貼り付け」「切り貼り」の11技法が判明し，「立体物」の技法を用いた「袋物」は作品数の1/3を占めていた。

5. 立体・半立体技法は，表現効果が顕著であるが，それに比べ平面技法は視覚による技法の判別が難しいことがわかった。また，用途により「縫う」「貼る」の技法を選択していた。

6. 「ちりめん細工」の技法は，縮緬を用いることにより効果的に表現される。緻密であるが，特別な器具を使用しないで製作することができ，本来の裁縫技術の向上に繋る技法である。

7. 「ちりめん細工」の「立体物」は「洋裁」を徐々に導入してゆく明治・大正期の裁縫教育の流れの中で，「対象物を立体的に見る目」を養う最適の教材であり，当時の女性達には新鮮で興味を引くものであったと推察した。

今後は，今回の結果をふまえて江戸時代に溯っての資料収集や，明治・大正期の裁縫教育の中での教材としての「ちりめん細工」についてさらに研究を進めてゆきたいと考えている。

最後に本稿をまとめるにあたり，「ちりめん細工」古作についてご指導，ご協力下さいました日本玩具博物館館長井上重義氏に深く感謝申し上げます。また，写真撮影をご許可下さいました藤井美術民芸館，平田記念館に御礼申し上げます。

注

1) 日本玩具博物館館長井上重義氏による名称
2) 桜井映乙子：近代学校成立期における手芸教育，和洋女子大学紀要13，51（1968）
3) 国立国会図書館所蔵　明治期刊行図書　家事の部―裁縫・手芸―に分類されている文献
4) 文化女子大学図書館所蔵　服飾関係邦文文献
5) 須永金三郎：婦女手芸法，博文館（M 26）
6) 大橋又太郎：裁縫と編物，博文館（M 28）
7) 中村寿女：女子裁縫新書，矢島誠進堂（M 28）
8) 下田歌子：女子手芸要訣，博文館（M 32）
9) 樗溪道人編：裁縫と手芸，尚文堂（M 32）
10) 鏑木かね子：新撰女子の手芸，魚住書店（M 35）
11) 小岩井規太郎，塩田真三：実用裁縫全書，博文館（M 36）
12) 岡本政子：裁縫細工物全書，大学館（M 37）
13) 下田歌子：女子の技芸，富山房（M 38）
14) 小出新次郎：和洋裁縫大全10の下・11の上下，女子裁縫高等学院出版部（M 40）
15) 梶山彬：摘み製作新書，広文堂（M 40）
16) 香蘭女史編：手芸と編物，井上一書堂（M 41）
17) 裁縫研究会編：裁縫教科書（教育実用），柏原奎文堂（M 42）
18) 栗原秀子，大和花子：和洋裁縫独まなび，精華堂（M 42）
19) 伊藤文子，小川錠子，高田久子：裁縫おさいくもの，大倉書店（M 42）
20) 山田興松：摘み細工指南，博文館（M 42）
21) 渡辺勝用編：和洋裁縫講義録，白菊会（M 42）
22) 伊藤文子，小川錠子，高田久子：続裁縫おさいくもの，大倉書店（M 45）
23) 女子手芸講義録　細工物科・裁縫小物科（M 45）
＊11冊からなる文化女子大学図書館所蔵文献。奥付けがないため出版社・出版社不明となっているが，掲載広告により筆者はM45年発行と判断し，本稿の資料に加えた。
24) 高橋貴四郎：新編裁縫の秘書，福岡県女子技芸教育会（T 4）
25) 戸板関子：実用新式戸板裁縫全書，広文堂（T 6）
26) 伊藤きん子編：和洋裁縫講習録 1～13号，（T 5～7）
27) 兵庫県神崎郡香寺町　［ちりめん細工」古作品の収集保存と復元に取り組み，古作品約500点，復元品1500点以上を収蔵。技術の伝承と普及につとめている。
28) 岐阜県高山市上三之町　常設展示作品
29) 岐阜県高山市上二之町　常設展「女子（おなご）―女性のくらし―」と特別展「装いの小物」より
30) 別冊太陽―縮緬小裂―，平凡社（1995）
31) 望月葉留：ちりめんの手芸，文化出版局（1980）
32) 花房昌古：ちりめんのお細工物，文化出版局（1990）
33) 井上重義監修：伝承のお細工物―ちりめん遊び―，マコー社（1992）
34) 水口婉子監修：伝承のちりめん細工，グラフ社（1994）
35) 井上重義監修：伝承の布遊び　ちりめん細工，日本放送出版協会（1994）
36) 花房昌古：ちりめん細工の袋，文化出版局（1995）
37) 主婦と生活社編：布切れあそび（1997）

参 考 文 献

明治以降裁縫教育史大要・裁縫関係法令抄，渡邊学園，（S 15）

関口富佐：女子教育における裁縫の教育史的研究―江戸・明治両時代における裁縫教育を中心として―，家庭教育社，（S 55）

伊藤瑞香，永野順子：明治時代の中等教育における裁縫科の内容分析―高等女学校を中心として―，日本服飾学会誌13，10，（1994）